胞衣(えな)がえりの教育学
—「シャグジ空間」と児童の言語生態研究会—

キーワード：シャグジ空間、時空転換(トランスフォーメーション)のつぼ

北九州市立浅川中学校　　秦　恭子

1．緑の transformation—Prologue

金蓮花の葉がすがたを消した。

六月二十二日早朝のことである。金蓮花、あの滴るようにうつくしい朱赤の花と蓮ににた円い葉が気にいって、ことしもまた庭さきで育てていたのである。五月のはじめにはちいさな円い葉をさかんに繁らせ、そのあいだからはカナリヤの嘴のようなつぼみを、すぅ、すぅとあちこちにのばした。じきにその嘴がやわらかくほどけはじめると、ふっくらとゆたかな雫形の花びらがすがたをあらわした。その滴る朱赤の花びらに彩られて、初夏の庭はビアトリクス・ポターの描くピーター・ラビットの世界のようにとたんにまばゆくなった。

しかし、六月にはいってから、その夢のようにうつくしい金蓮花のすがたは一変してしまった。日照りのせいか勢いがなくなり、花はしおれて葉っぱも斑だらけ。なんとかしなくてはと思いながら、日々の慌ただしさにとりまぎれて手をいれられずにいたのだ。たしか昨日のゆうがたまでは、終えかけた緑を風に揺らして、たよりなく鉢のなかに佇んでいた。それがどうしたことか、淡いきみどりいろの茎をのこして、みんな消えてしまったのである。あたりに一まいの落ち葉さえみあたらない。一体何がおこったのだろう——。

いぶかしんで鉢をのぞき込む私の視界の片すみに、ぽぅと発光するような緑がうつった。家屋の壁の一点である。「あれ、なんだろう？」。すぐさまそちらに視線を動かしたわたしは、一瞬にして事の次第をさとった。

金蓮花の葉、あのぴかぴかと円い葉は、一夜のうちに、けぶるようにやわらかい緑いろの幼虫となったのだ。緑の葉っぱをぎゅうぎゅうに満たした金蓮花の虫。ほの光りする緑の生きもの。白いうぶ毛につつまれたあえかないのちが、朝日のなかもぞもぞと壁を這いあがっていく。それは金蓮花の葉の、じつにうつくしい変身であった。

ゆうがた、金蓮花の化身にもういちど逢いにいく。——様子がおかしい。上半身をおこしてけんめいに空を仰いでいるのだ。ちいさな手足で天をかくようにして。「ああ、これはきっと——。」なんどもひれ伏すようなその姿をみているうちに、生きものの誠実が胸にせまり、ありがたいようなきもちがあふれて、わたしはしずかに部屋に戻った。

翌二十三日早朝。やはり、思ったとおり。さなぎである。まだまだ葉の青さをのこした、未熟なさなぎ。じぃっと見ているあいだにすこしずつ緑茶色に変化していく。やがて正午をまわるころには、きのうの早朝にみた緑の発光は完全に止み、茶色のさなぎが存在をぎゅっと閉じて時の外れにぽつんとくっついて居た。

あの円い緑いろの葉は、植物の領域を光りながらゆっくりと這いだし、短い幼虫の時をすごしたのち、いま閉じてその内がわに別時空をひらいたのだ。それは、生長という変化の奇跡にみちた時空である。わたしたちの目から隠れたその時空で、ちいさな生命はこれから劇的な変態をとげようとしている。そうしてやがて機が熟したときには、その背を割ってあらわれ、ひらひらと空へ舞い出してゆくのだろう。

その閉じられた時空、内密の流れ。外部の力が無神経にふれるならたちまちに壊れてしまうであろうその繊細な時空は、喩としてでなく、またときに喩として、わたしたちが通過してきた時空であり、これから幾度となく通過してゆくはずの時空である。あるいはまた、生命の育ち(＝巣立ち)[1]に寄り添おうという者にとっては、かならず立ち会うべき時空ともいえるであろう。

いまここに金蓮花のさなぎが孵るのを待ちながら、わたしはその時空に、生命に生長をもたらすその領域について、深く想念してみたいと思う。

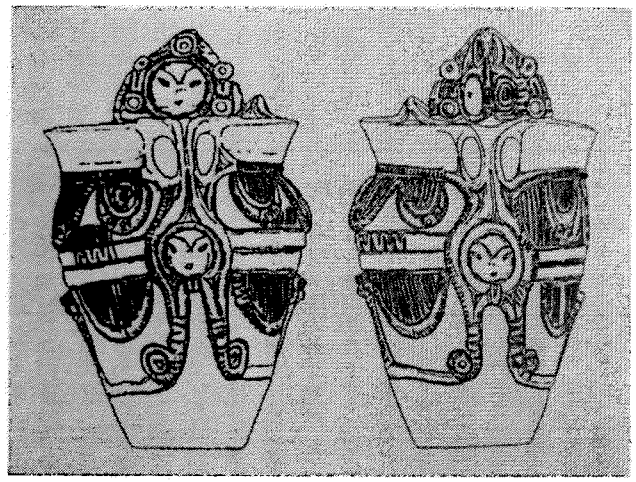
---

[1] 折口信夫「霊魂の話」に「すだつは、巣に連想が向いた為に、巣立つと説いて、主として鳥を連想するやうになつたが、語根 stu である事を考へれば、すだつ・そだつは同じものであると見ていゝ。」とある。(『折口信夫全集第三巻』中央公論社、p.268)

2．シャグジ空間―胞衣[2]と胎児の時空

こまやかな金糸につつまれたさなぎのうつくしい眠りに魅入っていると、おのずから心に浮かびあがる一冊の本がある。中沢新一著『精霊の王』である。

「ドリームタイム的時空を包み込む容器の中から生まれ出る子供神」[3]を表すとされる山梨県須玉町御所前遺跡の顔面把手付深鉢(図１)と、長野県富士見町藤内遺跡の半人半蛙文有孔鍔付土器の図像にすっぽりとくるまれて、それ自体まるでさなぎのようなつくりをした本。その装幀がしめす通りこの本は、さなぎの時空、すなわち胞衣につつまれた胎児の時空についての興味ぶかい幾つもの事例を、わたしたちの眼前にひろげてくれる。



(図１　顔面把手付深鉢　山梨県須玉町御所前遺跡)

題名である『精霊の王』は、国家以前の列島上のいたるところに生息していた「古層の神」、シャグジ＝宿神を指している。その縄文的な精霊と、それが棲み家とする空間に迫ってゆこうという壮大な旅の記述が本書のすべてであるが、その途上で次々とふれてゆく事例のおおくが、まさに胞衣につつまれた胎児、すなわちさなぎ様の形態としてこの世界のいたるところに顕現するシャグジ＝宿神のすがたなのである。そしてそれらの事例の深層をつらぬいて流れる領域、シャグジ＝宿神が棲み家とする空間を、本書では「シャグジ空間」と呼び、その本質に光をあててゆくのである。

示されるいくつもの事例は、わたしたち人間が古代から「律動をはらみ、変化と変容へのはげしい衝動に突き動かされ」[4]た「生命と富の貯蔵庫」[5]としての「シャグジ空間」にふれることによって、世界に、そしてみずからの心と身体に真新しい息吹を注ぎこんできたことを教えてくれる。それらの事例をわたしたちが自身にひき写して感じるなら、直ちにすべては、生命に生長をもたらす力の領域についての大切な示唆となる。

本書に散りばめられた事例のうちいくつかを、これからここに引いてみたいと思う。

事例１　縄文中期の土器図像と能楽伝書

本書第一章「謎の宿神」の後半に、『八帖花伝書』[6]のこんな記述が引用されている。

> 一　楽屋入りをして、物の色めも見えざる所は、人の胎内に宿る形也。
> 一　幕を打上げ出づる風情、是、人間の生るゝ形なり。[7]

中沢はこの記述をうけて「楽屋は暗黒の(物の色めも見えざる)空間であり、出番を待ってこの中にじっと身を潜めている芸人は、自分はいま母親の胎内にいるのだと観想しなければならない、とこの口伝は語っている。すべてが未発の状態にあって、力を湛えたまま静止と沈黙のうちにある。そして、幕を打って出る。これは出産の瞬間にほかならない。まさに新生児として出現するのが猿楽の芸である」[8]と述べている。

＊　＊

漆黒の闇と仄明かりとの織りなす幾重ものベールにつつまれたあのあたたかい空間。時折くぐもった音がやさしく空間をふるわせ、わたしは川底にあそぶ蟹の子ども等のようにして、上を過ぎる光のあぶくをまぶたのスクリーンに追っていた。空間はここ

---

[2] え-な【胞衣】胎児を包んだ膜と胎盤。(『広辞苑』より。)

[3] 中沢新一『精霊の王』講談社、2003、p.294

[4] *3 に同じ。p.163

[5] *3 に同じ。p.163

[6] 室町時代末期に編纂された、全八巻からなる能楽伝書。

[7] *3 に同じ。p.24

[8] *3 に同じ。p.24-25

ちよく脈をうち、それがふかい睡りをいっそうふかくに誘っていた。そこに生じるすべてが、わたしを護っていた。わたしはそのなかで、うっとりとまどろんでいたのである。なにも起こりはしなかったけれど、かわりになにか失うこともなかった。わたしはただ満ち足りたひとつの丸石のようにして、そこにころんところがっていたのであった。

あるときその空間に出口が生じた。鳥たちの卵のように、お蚕の繭のように、どこにもほつれほころびのないと思っていた空間に、それは忽然とあらわれたように感じられた。それは強烈に「外」を告げる穴であった。わたしはここに別れを告げて、これからそこへ出ていくのだとわかった。はじめてなにか失うことを思った。はじめてわずかに胸がいたんだ。けれどもそれと同じとき、胸のうちと身体のすみずみに、希望が宿った。わたしはいよいよ身をまるくし、じっと集中して、いまかいまかとその時を待っていた。

やがてぴたりとその時はきて、わたしは舟を漕ぎ出していった。ほの暗い洞窟、しだいに狭まっていくようにすら感じられるそのトンネルを、三日月の様な小鳥に導かれてすすんだ。空間はいよいよつぼんでいく、けれども、もっと先へ、もっと向こうへ——。

行き止まりはちいさなちいさな光る穴。見たこともないつよい光、目がくらむほどにかがやく穴。「この、むこうがわ！」　そうして頭を押しあてたとたん、身体がくるんと回って、わたしは光の穴に吸いこまれ、そこで記憶をうしなってしまった。

＊　＊

本書の装幀に用いられている、山梨県須玉町御所前遺跡の顔面把手付深鉢の図像（図１）は、まさにこの瞬間をとらえたものであろう。「ドリームタイム的時空を包み込む容器の中から生まれ出る子供神」を表現したものとして取りあげられている、この縄文中期の土器は、「弥生時代が古墳時代に移り変わる頃に、いちおうの原型をなしたと推測されるシャグジ（サクチ）の、さらに原型をなしたと考えられる縄文時代の思考法」[9]によって生み出されたものである。

小林公明[10]の説明[11]を引用しながら、中沢はつぎの様に語っている。

このあたりで発見される土物の土器の面によく描かれる図像の例から判断して、土器を抱きかかえるようにしている動物は、蛙であることがわかる。この蛙の背中がぱっくりと割れて、そこから生まれたばかりの子供が、顔を出している。ということは、蛙の背中は女性の性器で、そこから新生児が誕生しようとしている瞬間をとらえたのが、この図像だということになる。（中略）土器でつくられた「壺」そのものが、新しい生命を生み出すマトリックス（子宮）として思考されていたことになる。その表面には、水棲生物である蛙の姿が造形されている。蛙は死の要素をはらんだ両義的な存在であり、月と同じように死と生の要素を渾然一体としながら、おびただしい数の生命の増殖をおこなうのである。つまり、蛙に抱きつかれた壺の内部には、死と生とがひとつになって、まっ暗になった空に新月がまた輝きだすようにして、新しい生命をこの世に送りだそうとしていることになる。（中略）生と死がひとつになってやわらかな運動をくりかえしながら、リズミカルな呼吸を続けている空間。この空間は、「クラインの壺」のようなトポロジーをしている。内部と外部の区別がなく、生はいつしか死の中に溶け込み、死の中からふたたび新しい生があらわれてくる。これはドリームタイムの空間と同質のものではないか。これはドリームタイムを内蔵した壺である。この高次元の空間の背中を割って、子供は現実の世界に出て来るのだ。[12]

蛙に抱きかかえられた子宮。そこはわたしたちが帰り、還り、返り、孵る空間。長い冬眠をへて春によみがえる蛙に抱きかかえられて、壺は生と死のひとつに融け合う子宮となる。逆行する生と死、過去—現在—未来→の矢。それは子宮をもってひとつながりの円環となり、わたしたちは幾度も新生してゆく。この土器には、古代のそのような思考がみごとな造形をもって焼きつけられているのである。

---

[9] *3 に同じ。p.293-294

[10] 長野県八ヶ岳山麓から諏訪湖にかけてひろがる縄文中期の遺跡群をフィールドにする考古学者。現・井戸尻考古館館長。

[11] 富士見町編『富士見町史』富士見町教育委員会、1991　掲載論文。

[12] *3 に同じ。p.296-297

事例２　長門一ノ宮住吉の神

海の浅瀬に座りこんで、うちよせる波に身をまかせた経験のある人は多いだろう。ちゃぷん、ちゃぷんと耳もとに波音を聴きながら、海草と一緒にゆらゆら、ゆらゆら。自ら海になったようにして、あるいは生え出たひとつの海草になったようにして、このここちよい揺れにこのままいつまでも翻弄されていたいと思った、そんな経験である。

ときおり仰向いてじゃぶんと頭まで沈めると、髪の毛がゆらあっと水中を舞った。海草と髪の毛と白い両腕と。みんながおなじ流線を描いて、光る海面へ一斉に昇っていく。幼心にその光景はあんまりつよく美しくて、いまでも鮮明におぼえている。

これから示す事例は、おそらくそんな経験と無関係のものではないだろう。

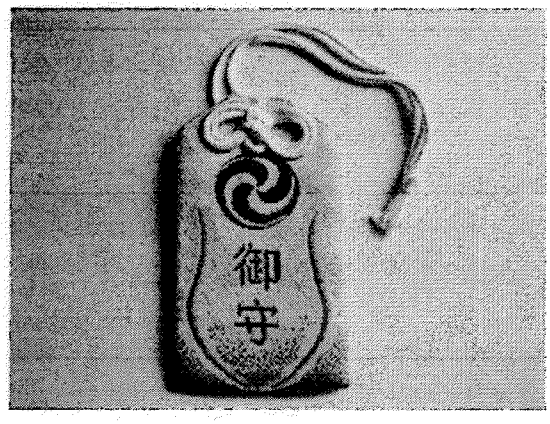
『精霊の王』によると、中世に生きた芸能者や職人は、シャグジ＝宿神を守護神として祀ってきた。ことに猿楽者たちはそれを守護神とするばかりでなく、宿神の棲む空間構造全体を表現しようとしていたという。とりわけ今日の能のなかでも最重要演目とされる「翁」は、この宿神の顕現の姿であると伝承されてきたらしい。そして興味ぶかいことに、『明宿集』[13]には、その「翁」＝宿神＝シャグジの示現(垂迹)の重要な例として「第一は住吉の大明神である。」と明記されているというのだ。

住吉の神といえば、わたしの家から車を一時間ほど走らせたところに、和布祭(めかりさい)で有名な長門一ノ宮[14]住吉神社がある。ご祭神は、住吉の大神。表筒之男命・中筒之男命・底筒之男命の三柱の神である。

黄泉の国からかえった伊邪那伎大神は、筑紫の日向の橘の小門で禊ぎ祓いをなさった。そのとき神の身体から祓われた穢れから次々と神が生まれた。神が中つ瀬に潜って身体をお清めになったときには、禍をもたらす二柱、八十禍津日神と大禍津日神が生まれた。つづいてその禍を浄化する力をそなえた神々が生まれた。表筒之男命・中筒之男命・底筒之男命の三柱もまた、このときに生まれたのである。[15]

和布祭(めかりさい)については、「特殊神事でありまして住吉神社の秘儀の一つです。神功皇后が当社を創祀された時神主践立(かんぬしほんだち)に命じて、旧元旦の未明、壇の浦の和布を刈り取らせ神前にお供えさせたことに由来します。深夜に奉仕される極めて重要で厳かな行事です。昔から奉仕者の松明(３メートルの大型)に会うことは禁忌とされています。現在も秘儀として公開出来ません。」と説明される。[16]そしてその刈り取られた和布に開運を求めて、今日でも早朝から多くの参拝者が訪れるのだという。

旧元旦の未明、氷る空のもと、装束を整えた神職たちが大きな松明に火を点してじゃぶじゃぶと海に入り、和布を刈り取って、神前にお供えをする。夜明けとともに、一年の幸運を願う参拝者たちが、その御利益に与ろうと和布を求めてぞろぞろと訪れる。そのような儀式が、神功皇后に命じられて以来、現在にいたるまで連綿と受け継がれているというのだから、じつに楽しい。今日においてなお、和布はわたしたちにとって重要な「海の幸」であるのだ。



(図２　和布の刺繍がほどこされた、
長門国一ノ宮の住吉大社の御守。)

『日本書紀』神功皇后の巻に「水葉も稚やかに出でゐる神」として名をあげられる表筒之男命・中筒之男命・底筒之男命の三柱について、『長門国一ノ宮住吉神社史料　上巻』の序文は、「渦潮のあらゆるものを浄化して、海草をも若やげる神秘力こそは、住吉三神の荒魂のいやちこ[17]なる霊威ではあるまい

[13]昭和三十九年に発見された能楽書。大和猿楽四座のうちで最も古い歴史をもつとされる金春座(円満井座)の芸能者・金春禅竹の手になる。
[14]現在の山口県下関市一の宮。
[15] 倉野憲司校注『古事記』岩波文庫、1963、p.30

[16] 住吉神社 HP より。(http://www.tip.ne.jp/sumiyosi/)
[17]いや-ちこ【灼然】神仏の利益・霊験のあらたかな

か。「わかめ」「あらめ」は住吉大神の精霊・海の幸の最高なるものであらう。」[18]と語る。それを引用しつつ、中沢は「海の渦潮の力の持つ強力なる浄化力こそが、住吉大神の威力の根源なのだ。(中略)禍をはらんだ悪しき力を幸福を生み出す善き力に転換させ、老化してしまったものを「ワカメ」のようないつも若々しい生命力にみちたものに転換させ、怨みを抱いて死んだものたちの霊が発散する荒々しい力を、富や幸福を生み出す肯定的な力に転換させる力がひそんでいる。」[19]と述べている。

褐色の和布とともにゆらゆらと漂っていた幼いころ、それを家に持ち帰ってたぎる湯に放ったことがある。わたしはその時のハッとした思いをいつまでも忘れないだろうと思う。あのとき褐色は、瞬間に翡翠色にかわった。

正直な気持ちを話すと、「和布は潮のなかに揺られてあればこそ」と思っていたのだ。海からの帰り道、そのぬらぬらごつごつとした和布に年経た妖怪を思ったりして、わたしはすこし気味悪くなっていた。

けれども湯にふれた和布をみたとき、その思いが、わっとひるがえった。なんて美しい色だろう。まるで翡翠の羽衣だ。海でみたたおやかな舞いが一瞬にして胸によみがえった。そうしてこれが、この色こそが、和布の魂だと思った。ことばは可笑しいかもしれないけれど、はっきりとそう感じた。

そのような思い出も重ねてよいだろう。いかなる禍、悪しき力も、富や希望や幸福の光りあふれる力に転換し、老朽し擦り切れていま果てようとするいのちも、輝く翡翠色の若やかないのちに浄化してしまう、渦潮のもつ強力な「禊ぎ祓い」の力。それこそがこの神の霊威であり、和布は海中に舞う天女のごとき精霊なのであった。

その力はまた妄念と過去の曇りのために見えなくなった眼にも、ふたたび澄んだ視力をあたえるだろう。わたしたちをがんじがらめにする全てをすっかり水に流して、赤ん坊の透徹さでもういちど世界を見つめなおすことさえ、その力は叶えてくれるのかもしれないのである。

事例3　サーカス

「よーん　よーん　よん」という音を聞いて、全身にわっと力が漲るのはわたしだけであろうか。これは、わたしの母が、赤ん坊のわたしをあやす際に口ずさんでいた不思議な音律の唄である。

「よーん　よーん　よん」。このフレーズとともに母は身体を上下左右に揺らし、またそのくりかえすなめらかな揺れに小気味よい節を刻むようにして、「ポーン、ポン」とわたしの身体を打ってくれていた。ゆらゆらとした揺れのなか、母の手の重みが一定の間隔で刻まれる心地よさ。それに委ねきっているうち、不思議と荒れくるう気は治まって、なみだは止まり、眠りのなかに沈んでいくことができたのだ。

泣きわめく赤ん坊を抱きかかえてあやす母親の身体は、誰に教わらなくとも、おのずから揺れるものであると聞いたことがある。赤ん坊はそのリズミカルな揺れのなかに連れもどされることで、安心充足し、ふたたびすやすやと心地よい眠りに落ちていくことができるのだろう。わたしなど神経質なたちで、母の揺れが止んだとたんに、その幸福な空間が破られたのを察して、わんと泣き出していたのだそうだ。母はじぶんの寝不足をずいぶんとこらえて、日がな一日そのやわらかい揺れのなかにわたしをつつんでくれていた。

その甲斐あって母のこえはいまも耳の底で響いて、諸々の現実にふれては摩耗するわたしの心を、おだやかに鎮めてくれる。

「よーん　よーん　よん」。
「よーん　よーん　よん」。

この音をいまあらためて書いていると、そこにおのずから引き寄せられてくるひとつの詩がある。「ゆあーん　ゆよーん　ゆやゆよん」。中原中也の「サーカス」である。

幾時代かがありまして
**　茶色い戦争ありました**

幾時代かがありまして
**　冬は疾風吹きました**

幾時代かがありまして

こと。きわだっているさま。(『広辞苑』より。)
[18] *3 に同じ。p.172
[19] *3 に同じ。p.173

今夜此処での一と殷盛り
今夜此処での一と殷盛り

サーカス小屋は高い梁
そこに一つのブランコだ
見えるともないブランコだ

頭倒さに手を垂れて
汚れ木綿の屋蓋のもと
ゆあーん　ゆよーん　ゆやゆよん

それの近くの白い灯が
安値いリボンと息を吐き

観客様はみな鰯
咽喉が鳴ります牡蠣殻と
ゆあーん　ゆよーん　ゆやゆよん

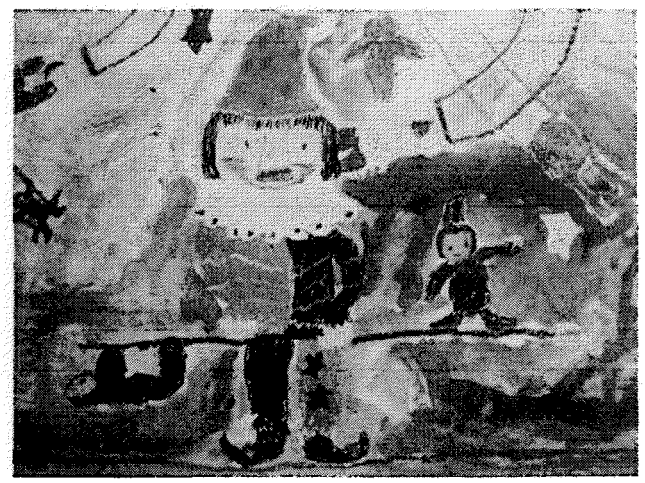
屋外は真ッ闇　闇の闇
夜は劫々と更けまする
落下傘奴のノスタルヂアと
ゆあーん　ゆよーん　ゆやゆよん[20]

サーカス小屋。その「汚れ木綿の屋蓋のもと」、空中ブランコは大きくしなる。「ゆあーん　ゆよーん　ゆやゆよん」。「落下傘奴のノスタルヂア」は、「よーん　よーん　よん」と揺れる母に抱かれたわたしへのノスタルヂアに通じて、サーカス小屋はいよいよ強い夢となる。

中沢はそれをとりあげてこのように語る。

サーカスのテントこそ、地上に出現した巨大な母の胞衣なのだ。(中略)テントの中の小精霊たちは、空中にするすると下ろされた「見えるともないブランコ」に、足をひっかけて、頭を下に手を垂れて、ゆらりゆらりとブランコを揺するのである。すると、梁がいっしょに揺れはじめ、振動はテント全体に及んで、いつしかこの象徴的な胞衣に守られた空間全体が、「ゆあーん　ゆよーん　ゆやゆよん」と振動をはじめる。これに見とれるお客様は、みんな鰯の群と変身し、牡蠣殻よろしく咽喉をかりりと鳴らすのだ。テントの外は真っ暗で、テントの中の空間だけが、安い電灯の光に照らされながら、振動し、息を吐き、世界が驚異であった頃の若々しい感覚を取り戻している――中原中也の描くサーカスは、全世界にとっての「後戸」の場所で演じられる、「胞衣をかぶって生まれた子供」としての芸能そのものではないか。[21]

こう語りかけられて、記憶の釣り糸はするすると一枚の絵を引きあげる。サーカス小屋で綱渡り芸にいそしむピエロの絵。わたしが七歳のころに描いた自画像である(図３)[22]。



(図３　筆者が七歳のときに描いた自画像)

画面中央に描かれるわたしは、たがい違いに色の置かれた衣裳をまとい、とんがり帽子にとんがり靴の出で立ちで、一本の綱の上にたつピエロである。吹きだしたくなるような化粧を顔いっぱいにほどこして、弥次郎兵衛さながらにバランスをとって揺れているわたし。その背後には、いくつもの空中ブランコが舞い、くりかえし大きな円弧を描いては、空間全体をしならせている。身軽なブランコ乗りたちはさも愉快気に「頭倒さに手を垂れて」、円弧から円弧へひょいひょいと自在に乗りうつって観客たちを沸かせている。そのあいだを星が飛び、小鳥が飛ぶ。子猿だって遊んでいる。描かれた三匹の子猿。

[20] 大岡昇平編『中原中也詩集』岩波書店、1981、p.18-20

[21] *3 に同じ。p.100-101

[22] この絵は当時通っていたアトリエで「あなたがなりたいものや、行ってみたい世界を描いてごらん。」と云われてはりきって描いたものと記憶している。

彼らはわたしの友だちなのだ。そのうち一匹はブランコ乗り。宙たかくぶら下がるブランコにちょこんと腰掛けて、いかにも楽しそうに揺れている。あとの二匹は、わたしと一緒に綱渡りだ。棒の左右にまつわりついて、おどけてみたりふざけっこしたりの彼らとともに、わたしはみごとなバランス芸をご披露している。

「ゆあーん　ゆよーん　ゆやゆよん」。すべてが遊動して止まない世界。背景は夕焼けに染まっている。わたしのサーカスは、夕焼けの胞衣(えな)につつまれた遊動世界として描かれていたのである。七歳の幼子が「巨大な母の胞衣(えな)」をはっきりと夢見ていたという、そのたしかな証を、わたしはこの絵に見たいと思う。そしてきっとその夢は、母のうでの中に揺られて見ていた夢と通じるものであっただろうと、いまふり返って思っている。

3．胞衣(えな)がえりの教育学

小学校にあがったばかりのころ、夜ごと気も狂わんばかりに泣き叫んで両親を心配させた時期が、わたしにはあった。とてもこわい夢をみていたのだ。物語のない夢。ただ闇のなかに押し籠められていくという、強烈な体感ばかりの夢。ついさっきまで水のなかで波とからだを一にして、流れ、たゆたい、渦巻いていたわたしが、とつぜんその大水から切りとられ、四角四面の型に注がれて、ぎゅうと押し固められるのだ。耐えられるわけがない。やわらかい胞衣(えな)は干涸らびてはがれおち、剥き出しになった皮膚が地割れをおこした。水から引き揚げられた魚のくるしみはこうもあろうかという耐え難いものであった。あのたっぷりとやわらかい水がほしかった。おぼろ月のようにやさしい意識でまどろんでいたかった。剥き出しの皮膚はびりびりと痛んで、いい様のない嘆きが内がわから突きあげくる。それは世界からはぎとられ放りだされたような、怒りにも似た嘆きであった。

胞衣(えな)につつまれた胎児として象徴される「シャグジ空間」は、学校教育という場において、とりのぞかれるべき最初のものであったのかもしれないと今になって思う。何しろわたしたちの学校教育は、めくるめく差異に満ちたおどろきとよろこびの世界を、わたしたちの身体にぴったりと密着した親しい世界を、即座に言語論理にすり替えることばかりを知性として教えるものであったから。躍動する身体はおさえこまれ、カラカラに渇いた空虚な知識が心を埋めていった。おまけにわたしたちは、そこへ通うことを余儀なくされていたのだ。遊びのきく主軸でかろやかに身をひるがえしていた幼い心はいつしか、「私」を中心とした言語体系の軸にぐるぐると巻きつけられていくだけの、論理的同一性の虜となっていった。

けれど高等教育も終盤にさしかかろうというころ、わたしは「シャグジ空間」に鳴る鈴の音をエンジン音とするふしぎな教育研究会にであうことになった。『精霊の王』によって励起されようとする「シャグジ空間」の律動を根とした思考が、いまだこの風土のうちに、しかも教育の片すみにひっそりと息づいていたのだ。それが「児童の言語生態研究会」である。

児童の言語生態研究会は、1968年に玉川大学の上原輝男先生によってひらかれた、幼稚園と小学校の現場の先生方による教育研究会である。彼らの四十年にわたる旅の目的は、研究会の設立趣意に以下のように記されている。

(前略)われわれは生育しつつある子どもの言語生態を、正確に見届けることを、何よりの国語教育の基礎に据え、そこから出発すべきであります。遅ればせながら、感情・思考・及び意識の発達とともにある子どものことばの実態を、調査、研究して、子どもの側からの発言を世に問いたいと思います。

思えば、子どもの言語生態とも言うべき基礎資料を得ることなしに、国語教育の目的と方法が論じられすぎました。また、われわれ現場人が、それらの基礎資料をどれほど整えて子どもに接していたでありましょう。国語教育の目的と方法及び実践の確立に資すべき、最初の条件であったと思うのであります。(後略)[23]

「子ども(人間)とはなにか」という根源的な問い

[23]児童の言語生態研究会編『児童の言語生態研究』創刊号記載の「趣意書」より。

と軌道を異にして論じられる教育研究への不信を出発点とし、彼らは「子どもの心とことばとの成長並びにその明暗を正確に写しとった」[24]資料の収集作業を積み重ねてきた。子どもたちを「学習者」としてではなく、「言語生態(いきざま)」すなわち生態そのものとして受けとめ、記録し、その成長を見届けようとしてきたのである。[25]そうした試みのうちに見えてきたのは、この現実に遍在する「シャグジ空間」を先験的に知り、縄文土器に描かれた「ドリームタイム的時空を包み込む容器の中から生まれ出る子供神」(図1)さながらに、そこへ半身を浸している子どもたちの姿であった。

もちろん児童の言語生態研究会が、それを「シャグジ空間」と呼び習わしてきたわけではない。彼らはそれを、あるいはそこへの通路となる地点や領域を、「時空転換(トランスフォーメーション)のつぼ」としてつかまえてきた。

富士、山、水墨画(山水画)、夕日、道、橋、虹、穴、闇、つぼ、雪、お面、人形——ここに挙げきれないが、そのどれもが、彼らが子どもたちのうちに見届けてきた「時空転換(トランスフォーメーション)のつぼ」=「シャグジ空間」である。[26]この世界に用意されている実にたくさんのもの・ことに、子どもたちは心を大きく揺さぶられ、生命を奮って生きている。「時空転換(トランスフォーメーション)のつぼ」はまさに、子どものたくましい生命力の由縁なのである。児童の言語生態研究会に出会って、わたしはそんな大切な秘密を明かされたのであった。

さきに示した「サーカス」の絵(図3)、あの夕焼けの胞衣(えな)につつまれた遊動世界に導かれて、ここではその中からとくに「夕日」をとりあげてみたい。

小林照子による「子どもの感情生活における浄化作用について—'夕日'作文にみる子どものイメージ運動—」[27]には、「夕日」という題の下に書きつけられた、子どもたちの豊かな心の世界が数おおく紹介されている。[28]そのうちのほんの一握りではあるが、これからここに示してみたいと思う。[29]

＊ ＊

「くじけたり、元気がないと、赤くて大きい夕日を見ると、元気が出てきて、明日もがんばろうという気持ちになります。(6年男)」

「わたしはゆうひをみると、小さいときのことを思いだします。そして、うちにかえってしゃしんをみながら、小さいときのことを思い出します。じてん車にのってころんでないたとか、てつぼうからおっこって、そういうことをおもいだします。(2年女)」

「夕日を見ると私は死んでしまったインコの顔を思い出します。(5年女)」

「夕日を見ると、田舎のおばあさんやおじいさん、いとこたちのことを思い出す。そして、そばにおじいさんとおばあさんが立っているようだ。夕やけはぼくのおじいさんみたいだ。(3年男)」

「夕日を見ていると、つかれがとれて心がやわらぎます。一日のことが思い出されて、とてもおだやかな気持ちになります。(6年女)」

「きれいなだぁと思う夕日。夕日を見ていると気がやさしくなったような気がする。他の人も悪い心がぬけていき、善い心がもてると思う。」

---

[24]「児童の言語生態研究No.1　特集・子どもの連想と仮想と」(1968)、p.1

[25]彼らのあゆみの詳細については、会誌『児童の言語生態研究17号』参照。

[26]一つ一つの「「時空転換(トランスフォーメーション)のつぼ」については、「児童の言語生態研究会」No.1からNo.17参照。「児童の言語生態研究会No.17　特集・児言態とはなにか」には、「時空転換(トランスフォーメーション)のつぼ」を絵に描きおこした「イメージ絵巻」がある。

[27]「児童の言語生態研究No.13　特集・子どもの泣き」(1988)所収。

[28]このほか「夕日」を発動装置とした研究報告に、葛西琢也「時空の転換と子どもの神性—'ひぐれみち'という境界領域からの触発—」(「児童の言語生態研究会No.16　特集・子どもの神性と野性」2004)がある。

[29] ここに引用させていただいたものは、論文に紹介された102例の作文のうちのごく一部である。実際の調査では、関東圏の小学2年生から6年生の計667名の作文が集められたという。論文では、それら作文が詳細に読み解かれ、「夕日」が子どもたちの心に起こすイマジネーションについての優れた考察が示されている。

「よくねむれない時は、夕やけを思い出します。そうするとよくねむれます。(3年男)」

「夕日にはゆめがある。明日がある。夕日を見ているといやな事はわすれる。うれしい事を作ってくれる夕日は、人をなぐさめるために出てくるのかもしれない。(5年女)」

「夕日を見ていると、からだがぽっとあつくなってしまいます。それでじぶんがこの世界にいないのだとおもってしまいます。(3年女)」

「夕日を見るとぼくはゆめをみている気分になります。それは、あのまっ赤な空、そしてうす暗いあの感じを思い出します。地面もみんなの家もまっ赤。夕日をみているとあたたかい感じがして、ねむくなりそうになる。ほかの世界にふんわりふんわり飛んでいきそう。(5年男)

「夕日を見るとぼくはポカーンとつったったまま、「きれいだなぁ、青春というのはすばらしいものだ。」とバカげたことをいいます。あと、自分が自由になった気持ちになってしまいます。空を飛びたくなったり、もうちがう国のハワイにいる感じがして楽しくなったりします。夕日を見るときはいつもそう思います。夕日が上がると、なにか必ず楽しいことやいろいろ思いだすので、夕日というのは人をなにかの空間にさそいこむと思いました。(5年男)」

「あの夕日につっこんでみたい。(5年男)」

「でも夕日は、ゆめのかなたのように本当にきれいな色で光るので、その中へ走っていきたいような気持ちになります。」

「きれいな夕日。夕日を見ていると、自分まで夕日になってしまう気がする。ほら！足の方からオレンジになってきた。わっ！もうからだがうすーいオレンジだっ！足は下の方からだんだんこくなってきている。ういてきた！いっしょに夕日になっちゃうよ！そんな気がしてくる。あっ！(4年女)」

「(前略)ぼくはいつも夕日が来るのを待っている。いつもいつも待ってる。(3年男)」

「夕日を見ていると体がゆらゆらしてきてすいこまれそうになります。」

「まっ赤な夕日。これで明日はきっといいことがあるぞ。夕日よ夕日、おしえておくれ。明日は何があるんだい。きっといいことにちがいない。夕日。明日に早くしておくれ。どうか明日も幸せになってほしい。いつまでも幸せでありますように。(5年男)」

「きょう、夕日を見ました。夕日にのって、夕日にあなをあけました。そのあなに入るとはだかになってもあつくてしょうがないんです。あなから出たらやまだくんとまつもとさんがキッスをしてけっこんしていました。ぼくはあついのにへいきですごいなぁと思いました。やまだくんとまつもとさんは赤と青の線でむすばれていました。(2年男)」

「私は夕日と友だちになりたいといつも心の中で思う。(3年女)」

「夕日はぼくの友だちとも言えるでしょう。大きくかがやく夕日に向かって「おーい、夕日」と言いたいです。(3年男)」

「僕は、いつも夕日をみつめている。その夕日は、僕になにかささやいているようだ。笑いながら。僕は夕日のささやく言葉を心を落ち着け、一言一言かみしめて聞く。(中略)色々色々問答をしていると、夕日が僕を深い眠りにおとすような気がした。(6年男)」

「夕日を見ると自分の一生と、過去が見えて来るように感じます。自分より何倍も大きく、明るく、優しく見える夕日は輝いています。そして素直さがあると感じます。そして自分の鏡だと思います。(後略)(6年男)」

「(前略)そのとき夕日を見ると、なにかとってもやさしいおかあさんのように、ぼくを見守っているように感じた。そして何かとっても明るくあったかいようなものをかんじて、何かほほえんでしまった。そしてつかれたし、夕日があっておかあさんのようにあったかいので30分ぐらいねてしまった。」

＊ ＊

いつまでも読み耽っていたくなるような子どもたちの語りである。わたしたち人間のうちに、夕日はこうも大きく温かくあったのだと、子どもたちに教えられ、記憶は鮮やかによみがえる。

わたしたちはうつくしい夕日にうっとりと染まる。そしてときに遠い思い出にかえり、ときに鏡の様にじぶんを映し、ときにつらい思いを慰められ、ときに悪い気持ちを鎮められて、またときに友の様に語らい、ときに夕日になりたいと思い、ときにゆらゆらと吸いこまれてどこかへ運ばれ、ときに母につつまれる様にしてぐっすりと眠りこんで、元気に明日へとむかうのである。

「時空転換(トランスフォーメーション)のつぼ」＝「シャグジ空間」。その浄化力と転換力の漲る、母性的な保護膜につつまれた空間が、夕日に照らされる子どもたちのうちにはっきりと立ち上がっている。それゆえ子どもたちはその空間を「いつもいつも待っている」のである。

この世のうちに遍在する「時空転換(トランスフォーメーション)のつぼ」、母の胞衣(えな)につつまれたその懐かしい空間に還らんとすること。それはすなわち、不屈の生命力、まあたらしい生命力に、みずからの存在の根をふかく下ろすことである。禍から福が生まれ、死から生が顔を出す浄化と転換の時空。その母の胞衣(えな)にわたしたちは繰りかえし還り、幾度も生まれ変わる、幾重にも生長をとげる。児童の言語生態研究会が、子どもたちの「時空転換(トランスフォーメーション)のつぼ」を探究してきたことの目的と価値は、ただその一点にあるだろう。

還ることは孵ることである。子どもたちにとって、それはまだ記憶に新しい。それゆえに、この世に散りばめられた母の胞衣(えな)への通路を、大人たちよりもずっとよく知っているのだ。児童の言語生態研究会は、そんな子どもたちに導かれて、ともにその通路に立つ。そうしてその育ち(＝巣立ち)に寄り添い、またしっかりと見届けていこうとするのである。

教育というものの真のすがたを、わたしは彼らのこころみの内に思わないではいられない。

4．空を舞う緑の蝶—Epilogue

梅雨らしい雨降りの朝、背を割ってあらわれたのは、かぎりなく淡い緑の蝶であった。ふるふると細かにふるえるその身体は、赤ん坊のわななきそのもの、産声すらきこえてきそうな風情である。ふやけたようにしわくちゃの翅が、ゆっくりとひらかれていく、神聖な時。そこに魅入られてまばたきするわたしの瞼にはもうひとつの景色。それは、黒くかたい種の殻を今日のように割って地上にあらわれた、金蓮花の双葉、そのしゃわくちゃの姿。鳴りやまない産声——。

さなぎという第二の胞衣(えな)を通過し、幼虫の生を深いまでに捨ててまあたらしく生まれた緑の蝶は、前にも増していよいよ光そのものに近づいている様にみえた。

生命はめまぐるしく明滅し、死の淵その先っぽで生へとターンする。くるくると転換する生と死、「シャグジ空間」＝「時空転換(トランスフォーメーション)のつぼ」。あらゆる生命はそこに根ざし、とめどもなく生きてゆく。わたしたち人間の有り様もまた、例外ではなかった。

金蓮花の葉、あの緑いろは土を離れ、いま空へと舞い出していく。ひらひらひらひら。ふるえるように、ひるがえるように、空を舞う緑。いつかその身体が土に還るときには、またどんな転生をとげてゆくのだろう。希望でいっぱいになった胸で、わたしはしばらくそのかろやかな舞いに見入っていた。

緑いろのはばたきに振動する空が、一瞬、「巨大な母の胞衣(えな)」のように見えた。

＜主要参考文献＞

上原輝男『曾我の雨・牛若の衣裳
—心意伝承の残像—』暮らしの手帖社、2006
上原輝男『忘れ水物語』1987
大岡昇平編『中原中也詩集』岩波書店、1981
折口信夫『霊魂の話』
(『折口信夫全集第三巻』中央公論社、1964)
葛西琢也『英才児—その神性と野性』2006
倉野憲司校注『古事記』岩波文庫、1963
中沢新一『精霊の王』講談社、2003
児童の言語生態研究会編
『児童の言語生態研究』No.1～No.17